

Book Review

評者：岡本里美 富山県立中央病院 副院長・看護部長

イラスト看護診断

編集：古橋洋子／発行：医学書院

定価：2750円（本体2500円＋税10%）



イラストにより看護診断が示す世界をイメージできる本

看護診断は、看護の共通言語として、患者さんの看護上の問題を表現するツールであり、電子カルテシステムにおいても広く活用されている。当院では2007年に電子カルテを導入した際に、古橋洋子先生のNANDA-NOC-NIC研修会などで学習し検討を重ねた上でNANDA-NOC-NICリンケージを搭載した経緯がある。自施設で電子カルテを導入するにあたり、看護過程における看護計画立案のシステム化をどうするか悩まれた看護管理者も多いと思う。そして、システムを導入してからも看護記録の質向上のため継続教育が必要となる。当院では電子カルテ導入後にも、古橋先生から多くの看護職員がレクチャーを受けた。

本書は、看護診断の概念から具体的な事例までイラストを用いて解説されており、病院で働く看護スタッフや実習中の看護学生にもわかりやすく、看護診断が示す世界をイメージしながら理解できる本である。

第1章では、看護診断を理解し、活用するためのポイントが記されている。1つは、看護過程におけるアセスメントの大切さである。看護過程において、アセスメントなしに看護診断を導くことは不可能である。アセスメントにより看護問題の原因となっている関連因子にたどり着くことができる。もう1つは、NANDA-NOC-NICリンケージの重要性である。NANDA-NOC-NICリンケージとは、看護診断（NANDA）が決定すると

その解決された姿である看護成果（NOC）が設定でき、その成果を達成するための看護介入（NIC）を選択し実行するとその成果が明らかになるという、NANDA、NOC、NICの結合をいう。途中で選択が適切であるか定義などを確認しながら進める必要があるが、芋づる式に看護計画が立案できる優れモノである。

第2章では、NANDA-I看護診断267のうち、39の看護診断の「定義・事例」について、イラストを用いて領域ごとに解説されている。なかでも、定義は抽象化された概念であり翻訳された日本語であるため、わかりにくいものがあるが、本書ではその内容がイラスト化されていてとてもわかりやすい。また、診断指標は患者さんの症状・状態に近いものを選択すること、関連因子を1つに絞ることが示されているため、患者目標が明確となり、看護計画が整理される。さらにどのような事例・症状・状態の場合に適用・活用できる可能性があるか明記されており、その看護診断を用いてはならない事例や類似する看護診断との鑑別、使い分け方も説明されている。

本書を読んでいると、研修会での古橋先生の語り口調が感じられる。看護診断の概念から個々の看護診断の解釈、そして看護過程の展開方法まで、事例を交えながら明快にレクチャーしてくださる古橋先生の姿が思い浮かぶ、そんな1冊である。